



2025
Annual
Report
年次報告書

Voice of friends




FRIENDS
WITHOUT A BORDER

(認定)特定非営利活動法人
フレンズ・ウィズアウト・ア・ボーダー JAPAN
〒101-0031 東京都千代田区東神田1-14-11 ヤマダビル6F
TEL/FAX:03-6661-7558 friends@fwab.jp www.fwab.jp



Photo credit / Adri Berger , Kenro Izu , Yumiko Izu

“国境なき友人たち”

支援者の皆さまへ



2026年30周年にあたって

2026年はフレンズ・ウィズアウト・ア・ボーダー創設30周年となります。フレンズ最初のプロジェクト、アンコール小児病院開院から27周年、2番目のプロジェクト、ラオ・フレンズ小児病院開院から11周年を迎えます。

多くの皆さまのご支援とスタッフの熱心な働きのおかげで東南アジアの多くの子どもたちの健康に貢献してこられましたこと、心よりお礼申し上げます。

創設30年にあたってフレンズ・ウィズアウト・ア・ボーダーとフレンズの病院の創設理念を確認したいと思います。

それは思いやりのケア、愛情を持つて患者さんとそのご家族に接することですが、同時に共に働く仲間同士にも愛情を持つて接することも大変重要なことと考えます。

愛情で繋がれたチームでこそ、来院する患者さんと家族にもその愛情が伝わるものと思います。

私たちが2つの小児病院を立ち上げた時、当時カンボジアにもラオスにも無い「特別な」病院にしたいと願いました。

それはアンコール小児病院もラオ・フレンズ小児病院もその仕事は愛と思いやりの

心で患者さんのみならず、病院スタッフも含めて家族のように互いに接していくことです。

病院は医療、看護、総務すべて、それぞれハードルの高い高度な技術と弛まぬ努力が要求されます。しかしフレンズの病院はそれらに加えて愛と思いやりを持つて、Compassionate Care

「思いやりのケア」で「全ての患者に我が子のように接する」フレンズの理念を病院で行うことができると信じています。

これはラオ・フレンズ小児病院、フレンズJAPAN、フレンズUSAそして多くのボランティアの皆さま、世界中の支援者の皆さまとのチームワークによって初めて成し遂げることができることです。

これからもこの初心を忘れず、またこの理念を現地スタッフが心に刻んで誇りを持ってラオ・フレンズ小児病院を更なる高みへ運び、アジアの小児医療の理想の形となることを願っています。



フレンズ・ウィズアウト・ア・ボーダー
創設者 井津建郎

2025年、ラオ・フレンズ小児病院（LFHC）は区切りとなる10周年を迎えました。10年前にラオスの小児医療の改革を目指してスタートし、ラオスの国

人、文化を学びながらこの国にふさわしい病院作りを目指してきました。外国人が自己満足で作った病院にならぬよう配慮してきましたが、その中で働くスタッフは、どのように感じているのか？ということが、この節目の時に気になりました。

そこで、スタッフにLFHCで働いていることをどのように感じているのかを聞いてみると「あそこ（LFHC）に行けば治してもらえると（人々から）言われている病院で働けていることが自慢です」という回答がありました。病院が地域からの信頼を深めていること、そして、そのことを自慢したいと思えるようになったスタッフがいること、つまり、病院もスタッフも驚くほど成長していることがとても嬉しくなりました。ラオス人によるラオス人のための病院、そして、地域に根付く医療の確立という将来の目標が現実になじっていることを感じます。

その実績の積み重ねが、国外からも認められつつのあるのではと思うことがあります。一つの証としては、2025

年11月の愛子内親王殿下のご訪問です。ラオスの国がどこにあるのか知らない人が多いほど認知度が低い状況でしたが、ラオスという国や当院の活動に注目していただくチャンスとなりました。また、殿下を院内ご案内中には、異文化で働くことへの課題などに関するご質問をいただき、私たちが日頃直面している課題を殿下にもお伝えすることができたことは、この上ない喜びでした。

地域からの信頼を受けている病院であること、また愛子内親王殿下のご訪問をお迎えした病院であることをこれからも誇りとし、進むべき道を着実に歩んでまいります。引き続き、温かく見守っていただけますと幸いです。



フレンズ・ウィズアウト・ア・ボーダー JAPAN
代表 赤尾和美



私たちは「医療」「教育」「予防」を活動の柱としています



国際基準に見合った、質の高い病院を

フレンズ・ウィズアウト・ア・ボーダー JAPAN は団体創設以来、適切な医療を受けることが困難なアジアの子どもたちのために活動しています。

ラオスとカンボジアに非営利の小児病院を設立し、24時間体制で診療を実施。私たちの目指す小児病院は、「国際基準に見合った、質の高い、心のこもった医療を提供できる病院」です。

病院の外にも目を向ける、生活環境から考える医療

私たちの活動は病院内にとどまりません。経過観察が必要な慢性疾病患者をフォローアップする訪問看護や、保健・衛生観念が浸透していない農村部に向いて病気の予防活動も行います。遠方の地域に赴くことで見えてくるもの、医療の必要性に気づいていない人に教育することで防げることがあるからです。

病院の現地化に向けて、私たちができること

私たちの目標は「現地の人の手で運営できる病院」です。いつまでも支援されるのではなく、自分たちで歩んでいける病院へ。そのためのスタッフ教育も、重要な取り組みの一つです。たとえば、病院の公用語を英語にすることで、世界中の指導者や書物から高度な技術を直接学んだり、自らが学会に参加したり、発信者となって世界に支援を呼びかけたりできるようにしています。

アンコール小児病院（AHC）はすでに現地化を達成しました。ラオ・フレンズ小児病院（LFHC）もまた、現地化を視野に入れながら、経験豊富な外国人スタッフやボランティアが日々、現地スタッフの育成に力を注いでいます。

Compassionate care

～小さな命に寄り添う医療～

すべてのことに思いやりの心を持って対応すること
どんな患者さんも我が子を思うのと同じように接すること
それが私たちの考える Compassionate care です
子どもたちに対する医療行為においてのみならず
当団体に関わるすべての活動は
Compassionate care の信条に基づいて取り組まれています

ラオ・フレンズ小児病院 （LFHC）

2015年2月、ルアンパバーン県立病院敷地内に設立しました。現在、最も力を入れているのが、このプロジェクトです。ラオスでは肺炎や下痢、栄養失調等、予防や治療のできる病気で亡くなるケースが珍しくありません。子どもの病気がわかっていても、貧しさゆえに治療しない選択をする親もいます。国の脆弱なインフラと山岳地形も、医療へのアクセスの妨げに。また、既存の病院や保健センターは、医療設



備の不足や、医療従事者の医療倫理と技術の不足などにより、十分な医療を提供できるとは言えません。ラオスが抱える「使われない医療」「使えない医療」という実情を、少しでも改善したいと願っています。

アンコール小児病院（AHC）

1999年2月、私たちの最初のプロジェクトとして、シエムリアップに設立しました。当初は私たちが運営を担っていましたが、目標を達成し、2013年1月に現地化。現在は「カンボジア人の、カンボジア人による、カンボジア人のための病院」として、私たちが育てたスタッ

フが主体となって舵取りを行っています。また、カンボジア国内の小児医療をリードする存在に成長し、国の医療行政に関わるほか、国内他病院の医療従事者、医療系学生や保健衛生に携わる人たちにも研修を提供。国全体の医療レベル向上に貢献しています。予防活動も、農村部や小学校に出向いての衛生教育を継続中です。

医療

2025年、ラオ・フレンズ小児病院（LFHC）は、設立10周年の大きな節目を迎えました。この10年で30万人以上の子どもたちに医療を無料を提供し、今ではラオスの北部地域にとって欠かせない医療機関になっていきます。LFHCで提供される医療は、質が高いことはもちろん、思いやりにあふれていることも大きな特徴です。その信頼性は地域住民にも広く浸透し、LFHCが地域の方々の希望と癒しの場になっていることに確かな成長を見ることができ

ます。

この1年、院内で深刻な問題となったのは、長期にわたる麻疹（はしか）の流行でした。前年は40件の症例しかなかった麻疹が、2025年は1200件以上に急増。スタッフが長時間の残業を余儀なくされたり、病床の確保に四苦八苦したりと混乱が続きました。それでもなんとか乗

り越えることができたのは、コロナ禍での経験が活きたから。あの過酷な日々も、今となっては大切な学びの機会であったと実感できます。

患者数の増加はどの診療科においても顕著で、全体の年間受診者数は5万2000人を超えました。診療科の拡充にも取り組んでいます。新たに小児整形外科、眼科手術の専門診療をスタート。難聴の子どもを支援するため、耳鼻咽喉科での補聴器提供に向けた基盤づくりにも着手し始めました。これらは国際的な医療ボランティアの支援を受けることで成り立っています。口腔外科、形成外科、熱傷治療、循環器科など専門外科チームの来訪もあり、院内で対応できる手術の幅が広がりました。海外医療チームとの連携は、今後も継続される予定です。



外来病棟

患者数が前年比15%増加しましたが、昨年見直した新たな患者フロー体制と、救急部門との連携強化により、医療の質を維持しながら効率的に対応することができました。待ち時間の短縮、トリアージ（治療優先順位の決定）の改善がなされ、患者数が増えてもなお、サービス向上が推し進められたと評価しています。

入院病棟

入院患者数は引き続き増加し、昨年の過去最高2972人を大幅に上回る3639人を記録しました。麻疹流行の影響で大きな負担がかかりましたが、それによりさらにチーム力が高まったり、思いやりを示し合ったり、得られるものも多かった1年でした。



病棟では、感染予防・管理（IPC）Ⅱ医療廃棄物の分別を含む医療環境の改善の強化、臨床記録の改善に限られた資源の効率的運用に重点を置いて取り組んでいます。

手術室

2025年は、過去最多レベルの手術件数を更新し、大きく成長した1年となりました。新しい技術の習得や部署間連携の強化、術前・術後ケアの改善を通じて、高い医療水準を維持できたと自負しています。特に、外科医の直接介入なしで多くの小手術を実施できるようになるなど、チームの自立性と臨床能力が向上したことで、より迅速に、患者さんが必要とする治療を提供できるようになりました。



この成長を支えたのは、海外医療チームとの連携です。シンガポールの外科チーム、スイスの熱傷チーム、イスラエルの眼科チームなど、異なる地域から、複数回におよぶ来訪を受けました。これらの国際医療ボランティアチームは、口唇口蓋裂手術、熱傷拘縮手術、整形外科手術、小児眼科手術などを担当。手術によって多くの子どもたちの生活の質を劇的に改善することができたのは、非常に大きな成果でした。

麻酔分野でも、研修やワークショップを通じて人材育成が進んでいます。スタッフの専門性を高めるのはもちろんのこと、地域医療基盤の強化を見据えた育成に取り組みました。

集中治療室（ICU）

新たに4台の人工呼吸器を導入し、呼吸不全の重症患者さんへの対応能力を向上させました。高い性能を持つ最新の機器は、スタッフの人工呼吸管理スキルと相まって効果的に運用されています。

国際的な医療専門家の支援を受け、スタッフの技術向上や臨床判断力の強化を進めることもできまし

た。10月には専門経験を持つ8人からなる専任ICU看護チームを設立。ICUに特化したチームを作ることで、医師チームとの連携がスムーズになったり、専門知識を深められたりといった効果が期待できます。実際、その効果は現れており、これまでよりさらに質の高い患者管理ができるようになりました。また、データを活用した

Improvement（QI）プロジェクトや臨床ガイドラインの策定・更新により、予防戦略や急性期治療の改善にも取り組んでいます。

先天性心疾患や重症敗血症、麻疹合併症、日本脳炎などの生命を脅かす症例に当たるときは、チーム一丸となって患者さんと向き合うことができました。

新生児病棟

この病棟でも患者さんが大幅に増加。需要の高まりに対応するため、専門家育成に重点を置くことになりました。新生児には繊細で特別なケアが求められ、専門の知識や技



術が必要不可欠です。
新生児蘇生トレーニング、カンガルーマザーケア、新生児の痛みとストレスの管理、母乳育児支援、新生児と母親のスクリーニング（病気の早期発見と対処）など、新生児ケアのためのスタッフ研修を強化しました。

救急病棟

患者数増加と麻疹流行の影響により多忙で厳しい1年でしたが、重症例や複雑な症例が増える中でも質の高い救急医療を維持できました。長時間労働や時間外対応が余儀なくされる中、辛抱強く柔軟に対応し、思いやりを持って患者さんへ処置が施されたことは、スタッフの自信にもつながっています。

救急病棟では迅速な救命処置も重要な課題です。トリアージ体制を強化したり、入院病棟・手術室・検査科など他部署との連携を強めたりすることでチーム力を高め、この問題をクリアすることができました。

放射線科・画像診断部

医療機器などを主力とする総合電機メーカーのフィリップス社（本社オランダ）より超音波装置や携帯型装置の寄贈があり、診断能力が格段に向上しました。また、RAD・AID インターナショナルおよびフィリップス社から、継続的な研修と技術支援を受けることが決定し、年間を通じて10人以上の放射線ボランティアが来院。超音波・X線、CTの技術指導が行われ、安全かつ効果的な運用が可能になりました。

検査科

新しい電解質分析装置の導入により、重症患者さんへの迅速かつ正確な検査が可能になりました。品質管理面では、国の外部評価プログラムやタイでの地域ワークシoppに参加し、血液ガス管理や貧血ガイドライン、検査リスク管理、臨床チームとの連携改善を学んだ他、寄付型母乳バンク支援や実地研修を通じて、チームの技術力向上も進められました。

障がい児クリニック

障がいのある子どもたちの生活の質向上を目的に、座位補助具や耐久性補助具の提供、言語療法による支援など、サービスの幅を広げることができました。この成果を導き出した要因のひとつは、日本のNPOであるアジア姿勢保持プロジェクト（ASAP）や株式会社シーズとの協力体制が継続したこと。低コストでカスタマイズ可能な座位補助具は、まさしく生活の質を向上させる道具として、患者さん本人にも家族にも喜ばれています。言語療法は、自閉症傾向や筋ジストロフィーの子どもたちを対象に提供されました。

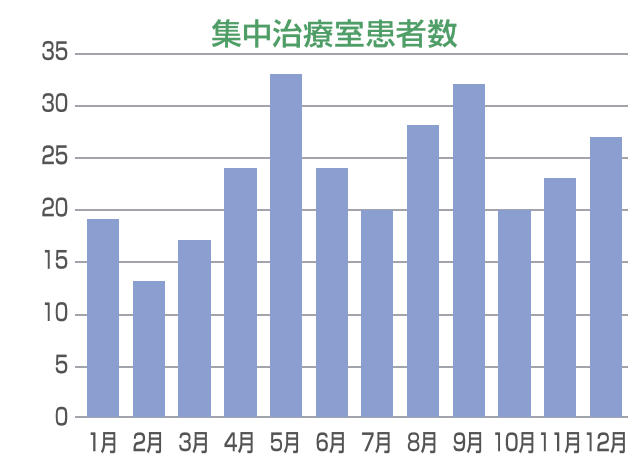
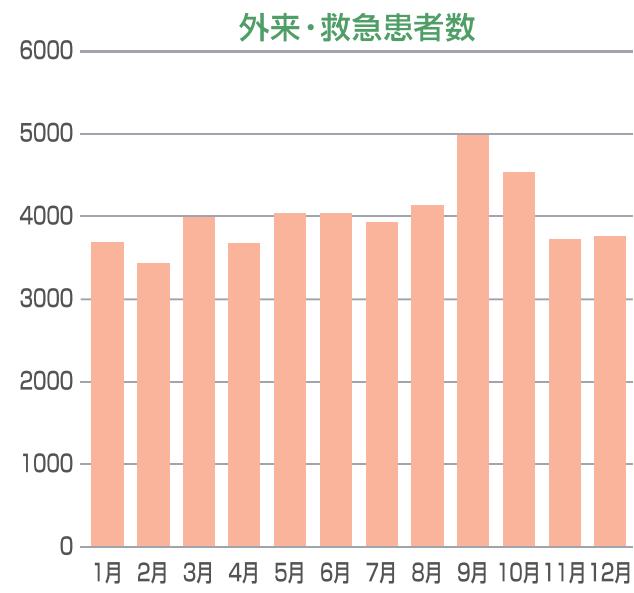
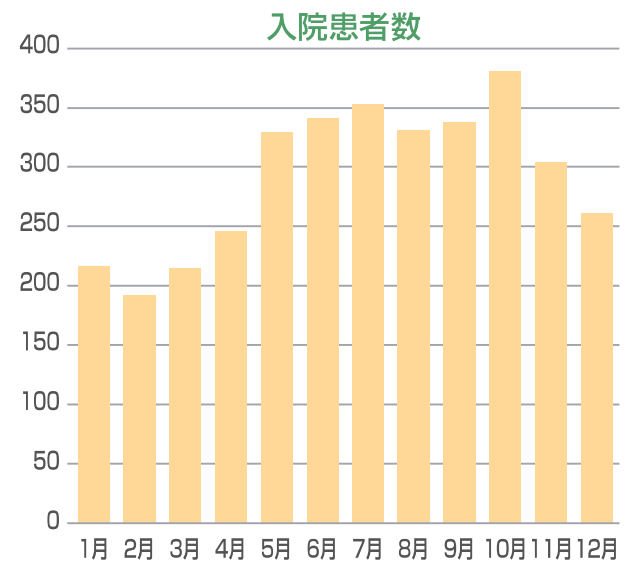


他・専門クリニック

ネフローゼ症候群などを診る腎疾患クリニック、てんかんクリニック、サラセミアクリニックといった、専門治療のためのクリニックを設置しています。各専門クリニックではそれぞれ、慢性かつ複雑な疾患を抱える子どもたちに対し、より専門的で継続的なケアを提供することができました。



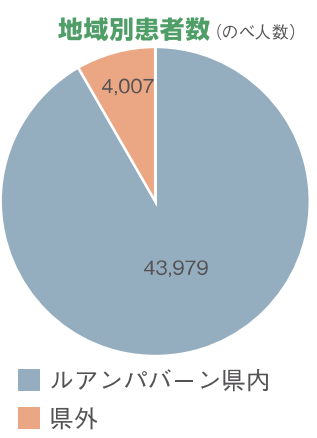
数字で見るラオ・フレンズ小児病院（LFHC）



年間患者数

外来患者数	: 27,244人
入院患者数	: 3,639人
新生児患者数	: 710人
救急患者数	: 20,742人
手術件数	: 1,188件

※のべ数



教育

ラオ・フレンドズ小児病院（LFHC）

の院内では、いつでもどこかで何らかの教育が行われていると言っても過言ではありません。医療機関である以上、医療スタッフの知識やスキルを上げるのは当然ですが、病院運営を支える非医療スタッフの能力向上、院内の公用語である英語のスキルアップなどにも多くの時間がかけられています。様々な研修は、院内スタッフのみならず、外部から受け入れている医療従事者や医療系学生も対象です。

私たちは、病院を設立する際、医療を提供するだけではない「教育病院」とすることを決めました。その理念に基づいて現地スタッフの育成をし、それが地域に波及して、いずれは国の医療レベルが向上するようにと願っているからです。

2025年は、院外への教育も強化されたほか、今後のLFHCを牽引するリーダー研修もより活発になりました。

院内教育

病院の日課として、毎週火曜日から木曜日は毎朝、病院全体で教育の時間を設けています。毎週月曜日は部署ごとに教育を実施。病院には様々な職種が混在しますが、どの職種でも定期教育が行われています。症例検討を通じては、臨床能力やチームワーク、職責に対する意識の向上につなげることができました。臨床教育では、てんかん、新生児蘇生、重度栄養失調、ネフローゼ症候群、糖尿病ケトアシドーシス、先天性疾患、外傷医療など、幅広いテーマに向き合いました。

ジュニアドクター向けに、1年間の基礎教育プログラムを実施。6名の医師がプログラムを修了しました。高度な医療の担い手を育成するための専門医研修には、2名が進んでいます。専門医研修のクラスに進んだ医師たちはそれぞれ、外科と小児科でトレーナーとしての役割も担うことになりました。看護教育では、新生児蘇生、投薬計算、シヨック管理などの専門コースが設けられ、専門能力の強化に努めています。



特筆すべきは、リーダー育成のための研修です。臨床、補助、管理のそれぞれの部署をまとめるリーダーやマネージャーを対象にしたもので、2025年は58名が参加しました。管理能力やコミュニケーション能力を高め、責任感を抱いて、チームのモチベーションを保ちながらメンバーを率いることができる人材育成を目指しています。LFHCの現地化を実現するためには優れたリーダーが不可欠なため、この研修は今後もさらに充実される見込みです。

英語プログラム

医療、非医療を問わず、LFHCの全スタッフを対象に行われているのが英語教育です。能力別一般英語、医療英語（医師・看護師）、部門別クラス（アウトリーチ・リハビリ・放射線科）、個別指導など、週46コマのクラスが開設されています。2025年は4000時間を超え、英語指導が行われました。

2025年のトピックは、これまで院内スタッフのみ提供されていた英語プログラムを、LFHCで受け入れている医学生、看護学生、

助産師学生にも開放したことです。このことで、インターンに対する教育もさらに充実度が増しました。

国際的な学会参加や国を越えての医療連携など、英語でのコミュニケーションを必要とする場が増えていることもあって、スタッフも熱心に取り組んでおり、進捗テストの結果も良好です。

院外教育

LFHCは、ルアンパバーン県内外で、地域での小児医療の能力向上を推進しました。郡病院では、小児医療に関わる知識や技術、感染予防、記録管理など、多岐にわたる研修を実施。研修後の評価では学習の成果が認められ、定期研修の重要性が浮き彫りとなりました。

LFHCスタッフが指導者となり、外部医療機関や医学校で研修を請け負うことも増えています。急性栄養不良統合管理の研修を複数の県で行った他、ルアンパバーン健康科学大学では講義を担当しました。LFHCでの研修医・医学生・看護学生・助産師の臨床実習の受け入れも継続しており、多くの学生が臨床実習に臨んでいます。

予防

ラオ・フレンズ小児病院（LFHC）では、主に病院を受診した患者さんのアフターフォローを受け持つ「アウトリーチ」と、妊娠から2歳までの母子に着目する「予防プログラム」により、地域での病気予防活動を展開しています。

アウトリーチ

慢性疾患の患者さんや退院後の病状観察が必要な患者さんなど、投薬や見守りが必要な患者さんの家へ訪問看護に出向き、医療面と生活面で心理社会的支援を行います。また、手術前後のケアや緩和ケアなど、直接的な医療とは別の形で支援を受け持つ機会も増えていきます。これらの活動は、病院の外でも、患者さんとその家族に安心と希望を届けるものです。それぞれの事情を抱える患者さん家族に対し、思いやりを持って寄り添うことができます。

ました。

複雑なケアや告知の難しい案件も増えており、プライバシー保持、病状説明といった内容も含め、研修を通してスタッフのスキル強化にも取り組みました。

● 支援活動

健康教育1139回、家族カウンセリング561回、経済支援416件、在宅ケア事前評価67件に対応。虐待、終末期ケア、死亡後ケアの対応にもあたりました。フォローアップ電話1418件を実施。

● 国際医療ミッション

海外医療チームによる手術支援を受ける患者さんの、手術前後の対応にあたりました。今後の人生を変えうる手術をスムーズに受けられるよう、多角的にフォローする仕事です。心臓手術13件、口唇口蓋裂手術42件、形成外科25件、眼科手術25件。手術件数が増えた2025年、たくさん子どもたちをサポートすることができました。

● HIV・緩和ケア

脆弱な患者さんへの継続的な支援と、思いやりのある終末期ケアを提

供することができました。患者さん家族が孤立しないように寄り添い、尊厳と希望を抱けるよう導いています。

予防プログラム

生後1000日までを重点的に取り組む栄養プログラムは、地区や県の保健局、ユニセフなどと連携して取り組まれています。活動地域も徐々に拡大し、ルアンパバーン県の小児栄養改善に大きく貢献しました。

母子栄養教育や家庭支援を通じて、完全母乳率は82%を達成。家庭での食事の多様性でも成果が見られました。保健スタッフと村民ボランティアの研修効果もあって、村での成長モニタリング率は、10%未満だったものが75%以上にまで向上しています。急性栄養失調の発生も大幅に減少させることができました。また一部必要が認められた家庭への経済支援と電子データ管理を行うことで、治療アクセスや計画策定が改善。これにより活動地域拡大にも成功し、持続可能な栄養改善の基盤が整いました。



毎年、アウトリーチチームのためにアメリカからボランティアに訪れていた、看護師のPaulが世界しました。ラオスとLFHCを心から想い、誰にでも親切で、いつも笑顔で部屋を明るくしてくれる彼は、スタッフからも患者さん家族からも愛される存在でした。

彼が残してくれた多くのものは確実に心に残り続け、今後のチームの活動に活かされていくことでしょう。そしていつまでも、Paulは大切なスタッフの一員であり続けます。



ホリスティックアプローチとは？ マイシーのケース

マイシーに最初に出会ったのは、彼女が急性の栄養失調でLFHCの入院病棟にいた時です。治療によって栄養状態は改善され退院となりましたが、入院中にお母さんとお話する中で、貧困、知識不足、地域からの孤立などの課題が見えてきました。家庭環境がマイシーの健康に影響していると考えられたため、退院後は訪問看護でフォローアップをすることに。家を訪問してみると、予想以上に困窮している様子です。家の中には、鍋一つと皿が数枚、食料は何もなく、蓄えの米すらありませんでした。訪問看護では、身体の手チェックに加え、卵、缶詰、豆などの食材や衛生用品、衣類など最低限必要な家庭用品を提供。また、家族には栄養・衛生や子どもの成長に関する教育を繰り返し行い、健康維持のための行動変容ができるよう継続的にサポートしました。

生活環境を二気に変えることは難しい。それでも訪問を続けていくうちに、マイシーの健康は安定するよ

うになりました。そして、その成長と併せて見えてきたのが彼女の聡明さです。こちらの質問に対する受け答えなどから、とても賢い子だということを、どのスタッフもすぐに感じ取りました。

アウトリーチチームでは、「患者さんを疾患だけでなくホリスティック（全人的）な視点でとらえること」を大切にしています。気になったのは、マイシーの就学についての親の意向でした。マイシーの上には2人の兄と1人の姉がいますが、誰一人として学校に通ったことがなく、両親も共に未就学とのこと。母親には、軽度の知的障害が見られ、また、父親は常に農場に滞在し不在のこと。がほとんどでした。マイシーの就学について、村長さんを通じてご両親に伝えてもらいましたが、父親は断固拒否。子どもが学校に行くと農作業を手伝う者がいなくなり、生活がさらに厳しくなるからです。父親と直接会って根気強く何度も説得をしましたが、なかなか就学の同意は得られませんでした。そこで、就学支援をしている他の団体へ協力を依頼。

その団体から生活支援と子どもの就学に必要な費用・物品の支援が受けられることを約束し、ようやく父親を納得させることができました。マイシーと兄、姉、兄弟全員の就学にごきつたのです。

マイシー一家の地域からの孤立

は、ご両親が学校教育を受けていないことで民族の言語しかわからず、情報が入りにくいことが大きな要因でした。学校教育を受けることで、子どもたちがラオス語を理解できるようになって様々な情報を入手し、社会とのつながりも持てるようになりました。

その後マイシーに妹ができました。生まれつきの障害がある子で、色々な面で生活の負担が増えることにはなりましたが、子どもたちが学校へ行くことで将来への可能性が見えてきたことも確かです。医療面だけのケアとしたら、マイシーは病気を繰り返し、学校へ行くこともなく、もしかすると命さえなかったかもしれせん。LFHCアウトリーチプログラム



の『ホリスティックアプローチ』と『決してあきらめない』という活動の信念が、マイシーの健康を取り戻し、そればかりか、彼女の家族が抜け出せずにいた貧困と孤立からの脱却をもサポートできたのです。

ラオ・フレンズ小児病院 (LFHC)だより

LFHC開院10周年を祝う 記念式典が執り行われました

ラオス北部で唯一、無料で医療を提供する小児病院としてLFHCが開院したのは2015年2月のこと。LFHCでは10周年を祝う記念式典が執り行われ、フレンズの理事や支援者の方々が世界中から駆けつけてくださいました。他にも、ラオスの外務省・保健省など政府関係の方々、地域の保健リーダーの皆さま、国際ボランティアとして滞在しスタッフ指導に当たってくれた方々など、たくさんの方々にご参列いただくことができました。

フレンズが最初のプロジェクトを行ったカンボジアでも初めは国民性や文化の違いに戸惑いましたが、同じ東南アジアに位置するラオスにはまた別の国民性と文化があり、当初は驚くことばかり。国が違うのだから当然といえば当然です。戸惑いや驚きを覚えながらも、「すべての患者さんを我が子のように接する」という基本方針だけは曲げずに、小さな命に向き合う日々を10年続けることができました。一般外来と入院病棟のみでスタート



させた医療活動も今ではサービスの幅が広がり、アウトリーチ（訪問看護）や予防プログラム、外部教育などを通じて、院内だけでなくとどまらない多角的な活動が行えるようになっていきます。

いずれは、LFHCもラオス人の手によって運営されるようになるでしょう。それを目標に、次の10年、またその次の10年と、Compassionate Care（質の高い心のこもった医療）を続けていきたいと思っています。

May看護師が オーストラリアが支援する 特別研修のメンバーに 選出されました

Laos Australia Instituteが主催する女性のリーダーシッププログラムは、ラオス国内で女性リーダーを育成する特別プログラムです。ラオス全土から女性リーダー候補16人を選抜し、12カ月の研修を行います。LFHCのMay看護師は、この16人のうちの一人に選ばれました。ラオスを代表する女性として選ばれたのですから、これは大変な荣誉です。

May看護師は、今後のLFHCを牽引していくであろう人材で、院内でも信頼を集めています。この研修では、また一段と強いリーダーシップを身につけることでしょう。研修に参加することで得られる新たなネットワークもまた、今後の大きな強みになるはずです。

病院のリーダーにとどまらず、彼女が国を代表する女性リーダーとして飛躍することを願います。そしてそれは、LFHCはもちろん、ラオスの医療分野にもすばらしい影響を及ぼしてくれるに違いありません。

愛子内親王殿下がLFHCを公式訪問!!

天皇后両陛下下の長女・愛子さまが、初めての海外公務としてラオスを公式訪問なさいました。「愛子さまがラオスをご訪問」というだけで大ニュースでしたが、さらに輪をかけて驚きの大大大ニュースとなったのは、「愛子さまのラオスでの公式スケジュールにLFHC訪問がある」と判明した時です。

院内は、日本のプリンスさがいらっしゃるという期待と興奮に沸き立ち、反面、緊張も感じながら、歓迎の準備にかかりました。まずは、スタッフ全員で大掃除です。病院ですから、日頃から清潔は保たれています。それでも少しでも良い印象を抱いてほしいと、細かいところまで気を配りました。

2025年11月20日、LFHCに愛子さまご到着。フレンズ創設者の井津とルアンパバーン県保健局副局長Soukhaserm Thongphout医師がお出迎えし、歓迎の意味を込めて、患者さん代表から病院マスコットのぬいぐるみをプレゼントしました。この役を担うことになった女の子は、それはそれは緊張していましたが堂々と務め上げることができ、一生の思い出になったことと思

います。その後、LFHCのアウトリーチ部長兼フレンズJAPAN代表の赤尾看護師が案内役となって、愛子さまが院内をご視察なさいました。

愛子さまは一つ一つにとても興味を示され、気になることがあればご質問もされたようです。中でも、赤尾が特に印象に残ったのは、「異文化の中で働いていることを実感されるようなご経験はありましたか?」というご質問。ある患者さんの例をあげてお答えすると、「文化の融合に尽力することとはとても大変ですが、大事なことです」と、おっしゃってくださいました。赤尾は、「お伝えしたエピソードから、LFHCの意義やラオスの子どもたちの現状までを含め、その意味合いを十分にご理解くださった」と感激していました。

短い時間であったにも関わらず、優しく微笑んでくださったたり、お声がけくださったりする愛子さまに、スタッフや子どもたちはすっかり魅了された様子。日本の皇族にお越しいただいたことがスタッフの誇りとなり、仕事のモチベーションにもなっているようです。



SUPPORT



カンボジア支援

当団体が設立し2013年に現地化を果たした
アンコール小児病院(AHC)の2つの
プロジェクトを、継続して支援しています。

〔教育プロジェクト〕

院内のスタッフ教育はもちろん、院外の医療関係者に向けても様々な研修を行っています。

- 99人の医療インターンがAHCの病棟ローテーションを終えました。
- 349人の看護学生がAHCで臨床研修を受けました。
- 中堅医師6人がAHCで1年間の研究奨学生資格を獲得しました。
- 病院スタッフおよび外部医療従事者345人がAHCのワークショップに参加しました。
- 3196人の子どもたちが栄養失調の健康診断を受けました。
- 144人の小学校教員が基礎医療の訓練を受けました。
- 5778人の小学生に眼科の学習を行いました。
- 4148人の村人が栄養教育を受け、栄養改善のためのクッキングデモンストレーションに参加しました。
- 278人の学校教員が、応急手当て、基礎医療、水の衛生と手洗いの研修・訓練を受けました。



© Angkor Hospital for Children

外来患者総数：115,127人
入院患者数：4,059人
集中治療室患者数：1,668人
外科手術件数(大小含む)：25,047件
新生児患者数：415人

※のべ数

難民キャンプでの出来事
国境付近でのタイとの軍事衝突により難民となった人々を支援するため、休日返上でボランティアをしていたセレイとサンパスは、AHCアウトリーチチームの看護師2人組、避難家族の中に、弱っている新生児を見つけました。現場では処置が難しいと判断し、すぐさまAHCの集中治療室へ。診断の結果は新生児敗血症と皮膚発疹。避難キャンプでの厳しい衛生環境が原因でした。赤ちゃんの異変は感じながらも病気とは思わなかったというお母さんは、「AHCの看護師たちがいなければ母子ともにならなっていたかわからない」と話しているそうです。この経験は、スタッフが各々、AHCで働くことの意義を改めて思い起こすきっかけになりました。

〔地域保健医療プロジェクト〕

村や学校にAHCスタッフが出向き、保健指導や予防教育、栄養教育などを行うプロジェクトです。

- 519人の小学生が歯科治療を受けました。



ラオスを知ろう！



ユニセフ「世界子供白書2025」より抜粋

	日本	ラオス	カンボジア
新生児死亡率	1人	20人	12人
5歳未満児死亡率	2人	39人	23人
妊産婦死亡率	3人	112人	137人
平均寿命	85歳	69歳	71歳
家庭で衛生的な飲用水源を利用している割合	99%	96%	83%
家庭で適切なトイレ設備を利用している割合	100%	89%	83%

※新生児および5歳未満児の死亡率は、出生数1,000人あたりの死亡数。
※妊産婦死亡率は、出生10万人あたりの死亡数で、当該時期に妊娠関連の原因により死亡した事例が対象。

首都：ビエンチャン
面積：日本の約3分の2
地形：国土の約80%が山岳地帯で海のない内陸国
人口：758.2万人(2023年、ラオス統計局)
民族：ラオ族ほか50民族からなる多民族国家
気候：熱帯モンスーン気候(雨季5～10月、乾季11～4月)
政治体制：一党支配体制の社会主義国

ラオスの儀式「バーシー」

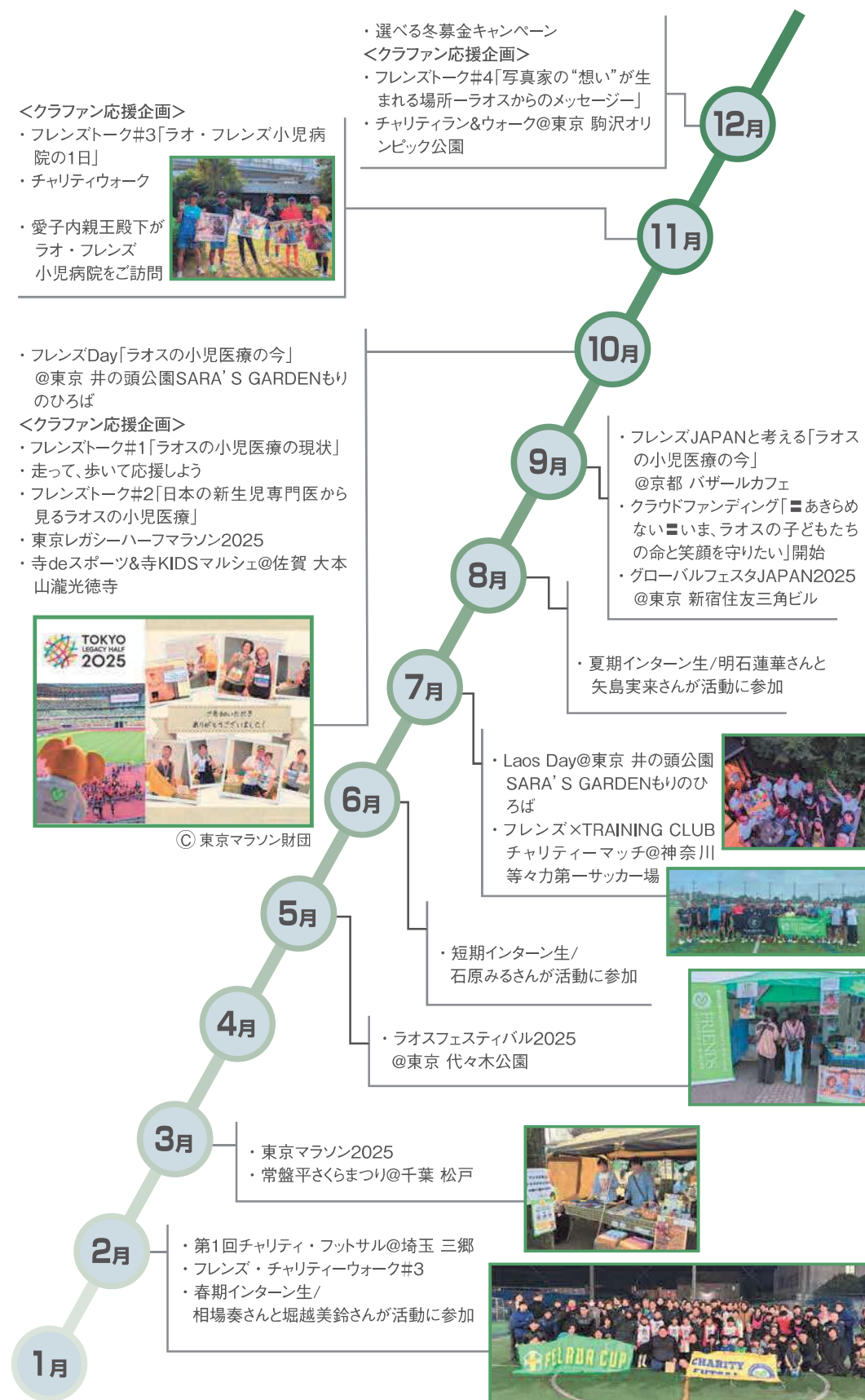
ラオスで何かを新しく始める時や節目の時は、まず「バーシー」から始まります。新年のお祝い、結婚式、出産、誕生会、歓送迎会、家の新築、車の購入などなど、まずは「バーシー」です。さて、「バーシー」って何でしょう？

正式名称は「バーシー・スー・クワン」といいます。ラオスで最も重んじられ、かつ日常的に行われている、健康と繁栄を願う伝統儀式です。バーシーは捧げ物、スーはへという格助詞、クワンは精霊・魂。つまり「精霊への捧げ物」という意味です。ラオスには古くからの精霊信仰が根強くあり、体と魂(精霊)がしっかりと結びついているのが健康で幸せな状態だと信じられています。人の体には32の魂(クワン)が宿っていて、節目の時に体から抜け出してしまう、要するに不幸になってしまう。出て行こうとする魂を体に繋ぎ止めるために行うのが「バーシー」の儀式です。

マリーゴールドやバナナの葉で装飾された鮮やかな祭壇を中央に



置き、そこに備えられた白い糸を、集った人たちが折りながら手首に結び合います。幸運が逃げていかぬよう、手首の糸は自然に切れるまでそのままに。それができなくても、最低でも3日間はずしてはいけなと言われています。
最近では、ニュース映像の中で、ラオス訪問中の愛子さまが晩餐会前に「バーシー」に臨まれているのを見た方も多いいのではないのでしょうか。帰国された後も愛子さまの手首には白い糸が結ばれたままになっており、話題になっていました。



東京マラソン&東京レガシーハーフマラソン

3月の東京マラソンと10月の東京レガシーハーフマラソンは、一般財団法人東京マラソン財団が主催する国際的なマラソン大会です。これらの大会にはそれぞれチャリティ枠が設けられており、その寄付先団体のひとつに当団体も認定されています。

東京マラソンには102人のチャリティランナーが参加。日本16人、アメリカ39人、メキシコ7人、タイ5人など、世界25カ国からランナーが集まってくれました。東京レガシーハーフマラソンには、日本9人、タイ3人、アメリカ2人の計14人が参加。どちらの大会のチャリティランナーも、合言葉は「Run for Children」です。たくさんの寄付先団体がある中で、当団体を選んでいただいたことをとても嬉しく思いました。



© 東京マラソン財団

イベントピックアップ

クラウドファンディング「■あきらめない■いま、ラオスの子どもたちの命と笑顔を守りたい」

9月から12月にかけて、クラウドファンディングに挑戦しました。これまでにない長い期間をかけた、これまでにない大きな目標額です。大きな長期支援の満了や大規模イベントの中止に加え、大幅な円安が長期化している影響もあって、病院運営費が逼迫している状況を訴え、ご支援を仰ぎました。

多くの方が代表の赤尾の言葉に耳を傾けてくださり、たくさんの応援をいただいたことは感謝しかありません。最終的に、350人以上の方々から、目標額の1千万円を大きく超える、約1千600万円のご支援をいただくことができました。スタッフ一同、応援してくださった皆さま一人一人に感謝を伝え、頭を下げたい気持ちでいっぱいです。心より御礼申し上げます。



絵本「えんとつ町のプペル」支援

映画化もされたキングコング西野亮廣さんの絵本「えんとつ町のプペル」をご存知の方も多いのではないでしょうか。西野さんが代表を務める(株)CHIMNEY TOWNでは、この絵本を世界中の子どもたちに贈るプロジェクトを展開しています。埼玉県三郷市のサッカーイベントでお世話になったベラーダジュニアーズ代表・広瀬秀貴さんにご紹介いただき、ラオ・フレンズ小児病院(LFHC)にも「えんとつ町のプペル」を10冊、ご支援いただくことができました。

絵本は日本語と英語で書かれているため、ラオス語に翻訳。翻訳前に、チャイルド・ライフ・セラピスト(遊びの専門家)のKongmengは、英語教師兼スピーチセラピストの



Catherineから絵本のストーリーを学びました。Kongmengによる読み聞かせが、子どもたちを楽しませています。

寺deスポーツ&寺KIDSマルシェ

佐賀県にある大本山瀧光徳寺さんは、古くから当団体をご支援くださっており、いつも様々な形で活動を応援していただいています。お寺で縁日のようなスポーツイベントを開催するので一緒に参加しませんか、とお誘いをいただき、当団体もブースを出展することができました。フレンズブースでは、活動を紹介するパネル展示をしたり、ラオスの雑貨を販売したり。秋晴れのスポーツ日和だったこともあって、たくさんの方がお立ち寄りくださり、ラオスの手作り雑貨を手に、色々なお話をすることができました。



当団体は「お呼ばれすればどこまでも」の精神(?)で各地のイベントにおじゃましています。お気軽にお声がけください。

こんな支援方法もあります

●本やCD/DVDを「ありがとうブック」に送付

家で眠っている本やCD、DVD、ゲームソフトを合わせて30点以上、宅急便で「ありがとうブック」に送ると、その買取代金が当団体に寄付されます。新品・中古は問いません。部屋を片付けて寄付につなげましょう。

問い合わせ先：ありがとうブック

<https://www.39book.jp/supporter/2095/>

●寄付型飲料自販機を設置

自販機の売上の一部が寄付先団体に寄付される

【寄付型飲料自販機】の設置を進めています。これは(株)伊藤園ネオスとコカ・コーラボトラーズジャパン(株)が社会貢献活動として行っているもので、ドリンクを買うと代金の一部が自動的に当団体に寄付される仕組みです。設置に関する詳細は、フレンズ事務局までお問い合わせください。



●イベントを開催

当団体を支援するチャリティイベントの企画・開催を歓迎します。たとえば、ご友人とのランチ会やゴルフコンペの会費に支援金を上乗せする、学園祭やサークルのイベントで募金箱を置く、自分たちでチャリティライブを行うなど。団体紹介の資料等が必要な場合は、お気軽にご相談ください。

●ブランド品を「Brand Pledge」に送付

着なくなった洋服やブランド品をダンボールに詰めて「Brand Pledge」に送ると、査定金額に500円を上乗せした金額がフレンズに寄付されます。

クローゼットの中に身に付けなくなったブランド品は眠っていませんか？もう出番はなさそうだけど捨てるには惜しい……と思ったらぜひ、そのブランド品を子どもたちへの支援にあててください。洋服やバッグ、アクセサリーだけでなく、スカーフ、ハンカチ、タオルなども対象となります。買取金額に対しては税制の優遇措置が可能な領収証を発行します。

問い合わせ先：Brand Pledge

<https://brand-pledge.jp/associate/fwabjapan/>

●グラフィックデザインなどの技能や専門知識を提供

チラシやDMのデザインを担当してくださるボランティアを募集しています。他にも、専門的な技能や知識を活かしたボランティアをしてみたい方、どしどしお声がけください。

●携帯料金とまとめて寄付

ソフトバンクのスマートフォン利用者は「つながる募金」を通じ、携帯料金と一緒に寄付ができます。100円からの毎月継続寄付、1回限定の寄付を選択可能。寄付金控除の領収証も発行します。

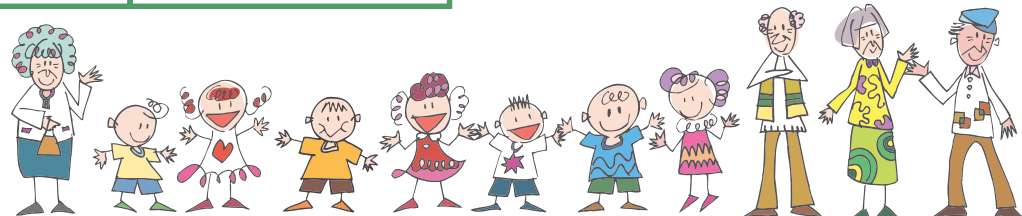
●遺産・香典を寄付

故人の遺志を、アジアの子どもたちのために役立てていただくことができます。活動地やプロジェクトを指定することも可能。必要な手続きを行うと、税制の優遇措置を受けることができます。

皆さまの支援でこんなことができます

750円	輸血パック1つ分	10,000円	入院治療費(ICU、新生児室、IPD)
1,500円	外来診察代5人分	30,000円	検査科の運営費1日分
7,500円	CTスキャン1回分		

※1ドル=150円の場合



How to Support 支援方法について

私たちの活動は、皆さまのご支援により支えられています。

支援方法をお選びいただけます

●正会員

年会費 シルバー会員

個人12,000円～

団体・法人30,000円～

ゴールド会員

個人30,000円～

団体・法人50,000円～

プラチナ会員

個人50,000円～

団体・法人100,000円～

(年度ごとに更新・議決権あり・入会申込書あり)

●賛助会員

年会費6,000円(支払月より1年間)

●学生賛助会員

年会費3,000円(支払月より1年間)

●マンスリーサポーター

月500円～自由に金額指定

(クレジットカードまたは指定口座より引き落とし)

●一般寄付(金額・回数自由)

※ご寄付には税制の優遇措置が可能な領収証を発行しますが、正会員年会費は対象外となりますのでご注意ください。

※PDFでの領収証発行にも対応しています。ご希望の方はお申し付けください。

※銀行振込や、インターネットからのカード決済も可能です。

※寄付金の10%は現地の活動を支えるための管理費として活用させていただきます。

マンスリーサポーターって何？

マンスリーサポーターになると、決まった金額が毎月、ご指定の口座から自動的に引き落とされます。「継続的に支援したい」「小さな金額で無理なくコツコツと支援したい」「年会費の振り込みを忘れがち」といった支援者様からの声にお応えして誕生しました。500円からの支援プランがあり、好きなプランをお選びいただくことができます。

<お申し込み方法>

■クレジットカード決済をご希望の方
右のQRコードもしくは以下にアクセス



<https://congrant.com/project/fwab/1658/form/step1>

■口座振替をご希望の方

フレンズ事務局までお問い合わせください。



2025年 活動計算書

2025年1月1日～2025年12月31日

特定非営利活動法人 フレンズ・ウィズアウト・ア・ボーダーJAPAN

(単位:円)

科 目	金 額
I 経常収益	
1 受取会費	954,000
2 受取寄付金	104,189,766
3 受取助成金等	2,904,000
4 事業収益	1,674,146
5 その他収益	226,540
経常収益計	109,948,452
II 経常費用	
1 事業費	
人件費	7,300,920
その他経費 支払寄付金	100,299,773
その他	16,546,011
事業費計	124,146,704
2 管理費	
人件費	2,304,674
その他経費	2,843,192
管理費計	5,147,866
経常費用計	129,294,570
税引前当期正味財産増減額	(19,346,118)
法人税、住民税及び事業税	70,000
当期正味財産増減額	(19,416,118)
前期繰越正味財産額	25,653,705
次期繰越正味財産額	6,237,587



2025年度役員

代表

赤尾 和美(看護師)

副代表

井津 建郎(写真家)

理事

草薙 直基

宗 綾子

(バイン株式会社 執行役員/社長室室長

株式会社シャイン・コーポレーション 社長室室長

三光ソフランホールディングス株式会社 宿泊事業部/

人事マネジャー)

戴 波留美

高橋 大輔

(三光ソフランホールディングス(株)専務取締役

メディカルホットライン(株)代表取締役

(医)誠光会 ひかりクリニック 理事

(福)誠高会 さくらんぼ保育園 理事)

田才 諒哉

松島 彰雄(前代表)

山下 徹真((宗)中山身語正宗 責任役員、妙光山

常行寺住職)

監事

熊井 昌広

2025年度正会員

和泉 直子

一乗 朋美

大松 誠二

小川 直美

小澤 誠

加藤 嘉哉

兼子 思

金子 知世

熊井 貴美

熊井 昌広

(株)熊谷組

小山 達雄

Sisyphus(株)

(株)シャイン・コーポレーション

鈴木 真人

(医)誠光会 ひかりクリニック

(宗)泰宗寺

大和証券(株)

高橋 俊晴

(株)ナース・ステーション

猶原 祥光

中山身語正宗 関東別院誓照寺

則包 哲

橋本 朋子

平岩 町子

松原 めぐみ

水谷 祐子

メディカルホットライン(株)

(医)横田小児科医院

自分だけが持つ「技」も支援になります

カンボジアやラオスへ行き、アンコール小児病院(AHC)やラオ・フレンズ小児病院(LFHC)の患者さんと、周辺の村々に住む子どもたちに、ヘアカットをプレゼントしてくれるグループがいます。この「カットボランティア」を発案・企画してくださったのは、ニューヨークと兵庫県西宮市でヘアサロンを経営するヘアスタイリストの南田稔さんです。当団体創設者の井津とは長年の友人で、団体設立とAHC開院の話に共感した南田さんは、日本の美容師仲間呼びかけ「Hairdressers Without A Border」を結成してくれたのでした。現地でのヘアカットが、どれだけ多くの子どもたちを喜ばせ、目をキラキラさせてくれることか!何の設備もない屋外での“青空美容室”は、いつも大盛況です。

南田さんは「大事なことは継続すること」とおっしゃいます。コロナ禍で海外渡航ができなくなると、新たに古着を寄付に変える企画をスタート。リユース会社の協力を得て、ご自身のサロンで集めた古着を買い取ってもらい、その売り上げを寄付する、という企画です。この古着支援はすでに13回も開催されており、ここでも継続の意志を伝えてくださっています。嘘偽りなく、言葉通り長くサポートしていただいていることが本当に嬉しく、ありがたいです。ご自身の技能を活かすご支援、仲間と一緒に楽しく取り組みそうのご支援、当団体では色々なサポートの形を受け付けています。お気軽にご相談ください。



自分ができることで支援!企画持ち込み受付中

kaonn-日音衣-(かおん)さんは、京都の素敵な着物屋さん。着物に現代風のエッセンスを加えたり、ベトナムやインドの生地や柄を用いたり、トラディショナルとモダンを融合した着物スタイルを提案していらっしゃいます。和洋折衷の小物類も含めオーナーの吉岡香里さんが自らデザインしたものも多く、よそとは一味違う雰囲気。なんと、ラオスのルアンパバーンにもお店があります!それがきっかけで、共通の知人を介し当団体の赤尾と交流が生まれました。以降、発想力豊かな吉岡さんが次々にフレンズサポート案を企画しては実行する、ということが続けてくれています。オリジナルTシャツをデザイン・製作して販売、フレンズ支援のための期間限定特別販売実施など。そこでの売り上げを、寄付としていただいています。今は、当団体から正式に依頼し、東南アジアで入手できる特別な石を使ってオリジナルのアクセサリーを製作中です。遠からず、皆さまにもお披露目できることでしょう。ご自身ができることを支援に変えるのは、簡単なようでいて案外ハードルがあるものです。それを軽々と飛び越える吉岡さんにいつも感動し、感謝しています。

